

日本マレーシア研究会 関西地区例会報告

信田敏宏

2006年5月27日、キャンパスプラザ京都にて、今年度最初の研究会を開催いたしました。今回は、加藤剛先生をスピーカーにお迎えして、京都大学での退官講義「川の流れるように――研究教育人生、来し方行く末」のノーカット版を3時間半に及びお話いただきました。会場の都合で、新記録達成とはなりませんでしたが、先生にとっても、私たちにとっても満足した講演会になったのではないかと考えています。加藤先生との出会いは、私を含めそれぞれの参加者にとって今後の研究人生に大きな影響を与えるものであったと思います。私たちを惹き付ける先生の魅力、その秘密を探るべく講演会を企画しましたが、今回はその一端が分かったように思います。ただ、そのことを言葉で表すのはとても難しいので、今回は秘密のままにしておきます。その代わり、参加者の方々にそれぞれの思いや感想を書いていただきました。以下、順不同・敬称略で掲載いたします。

長谷川悟郎（京都大学大学院）

加藤先生のおっしゃる「川の流れ」とは、平原のなかを悠々と蛇行する大河の流れのことです。日々の研究に気持ちが追いやられる私は、激流のなかに巨岩を砕きながら急斜面を出来るだけまっしぐらに突き進みたいと考えていました。積み重ねた過去と目標の設定も違うけれど、私の川は、あぁなんと細いものか。今回は加藤先生のカヤックに搭乗し、実は誰も教えてくれなかった「教育研究者」のこと、雄大な自然の中を案内していただいたように思います。ありがとうございました。

巖佐葵（京都大学大学院）

いろいろなエピソードやお話のはしばしに先生の人柄をうかがうことができ、感銘を受けました。ありがとうございました。なお、コーネル大学に毎週一度木曜日に研究者を招いてランチタイムにミーティングがあったという話があり、関西でもそのような会を開いたらおもしろいのではないかと思いました。また、村落での聞き取り調査の際の難しさのエピソードは、私自身の村での体験と重なり、興味深くうかがいました。

川上崇（京都大学大学院）

日本社会における「人の生きがい」への関心から東南アジアとの出会い、そして博士論文執筆時の2度にわたる研究トピックの変更など、ご報告のなかでも、とくに加藤先生の学部生、大学院生時代の話しを興味深く聞かせていただきました。

細田尚美（京都大学大学院）

『時間の旅、空間の旅』（めこん）の続編を聞かせていただいたように思いました。話の

長さは3時間半だったということですが、細かいところにも目配りされる加藤先生らしく、話の随所で披露されるエピソードや一口アイデアがとても面白かった。次回も楽しみにしています。「川の流れるように」という題で、今回で既に「河口」にまでたどり着いてしまったようですが、次回はどうなるのでしょうか。次回はついに海へ出発・・・でしょうか。

藤井美穂（京都大学大学院）

これまで私は、調査地では衣・食・住の変化と継続を捉えるために調査をしてきた。加藤先生のお話をうかがい、新たな視点を得ることができた。過去と現在を結びつけているモノをどのように見るのかということである。モノをAというモノと仮定しよう。モノAがAとして位置づけられる状況、そのように位置づける社会の見方があったのであり、その状況を考えることが必要だと思った。

内藤大輔（京都大学大学院）

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科に所属し、マレーシアを調査地としながら、講座が違うこともあり、実はこれまであまり加藤先生のお話を聞く機会がありませんでした。先生が退官される際の最終講義にもフィールド調査中で参加できなかったのが、今回JAMS 関西例会「川の流れるように——研究教育人生、来し方行く末」（ノーカット版）において、先生がこれまでどのように研究人生を歩んでこられたかを聞くことができ、大変貴重な機会となりました。学生時代の話やアメリカでの大学院の話、また学生に対する姿勢などにも感銘を受けました。行く先々での人との出会いを大切に、その関係を育んでいくことの重要性を改めて認識しました。「問うことを学ぶ」ことを実践しつつ、今後も機会をつくり、お話を伺いにいければと思っています。

匿名希望

講演で一番印象に残ったことは、「幸運」についてです。研究者にとって、よい師・研究テーマに出会うことや留学の機会を得ることなどはとても重要なことですが、そうした出会いや機会を掴むことができる研究者（加藤先生もその一人だと思います）は、日々のたゆまぬ努力によって、まれにしか訪れない「幸運」を掴む準備を怠らないのだと、改めて感じました。

増田和也（京都大学大学院）

「調査地では世間話をしなさい」。もう数年も前のこと、長期調査を直前にした私は、加藤先生からこのような言葉をいただきました。調査地の人々との何気ない会話のなかで、思いもしなかった事柄が飛び出すたびに、この言葉を思い返していました。このようなアドバイスをされた先生が、これまでどのような研究歴を辿ってこられたのかという関心から、このたびの例会は非常に興味深いものでした。

ご自身曰く、かなり迷いと偶然の出会いのなかで研究者の道へと進まれてきたとのこと、「川の流れるように」と題されたのは、そのことを意図されているということでした。学生時代の先生は、東南アジア研究にいたるまで、また、インドネシアに調査対象を定めた後も研究トピックは数度変わったようです。博士論文に取り上げたテーマは、西スマトラの村々を約3ヶ月もの間、バイクで廻られ、先行研究との違和感から至ったものだったということでした。以前、海外留学を終えた学生がその成果を報告する場で、事前の研究計画と実際の研究テーマが大きく変わっていたことに、加藤先生は「興味深い」と感想を述べておられましたが、こうしたご自身の来歴と重なるものがあるのでしょうか。

しかし、ただただ流れに身を任せてきたわけではないようです。ひとたび調査地や調査対象を定めると、それが大きな枠組みのなかでどのように位置づけられるか、つねに意識されてこられたようです。たとえば、上記の研究テーマが定まった後の調査地選定には、仮説を設定し、それを実証するために適当な条件から戦略的に見つけ出されたとのこと。そして、とかく特定条件に埋没しがちな事例研究は、3ヶ所程度の事例と比較するのが適当だと話されました。

ミナンカバウ研究の後に調査地をリアウ州に移された後も、あらたな調査地を探すために、まだまだ道路事情の悪いリアウ中をバイクで廻られたそうです。リアウでは特定の村に、結果として25年にも及ぶ長い期間を通いつづけ、同一地の時間的変化を調査されておられますが、その厚いデータも大きな視点のなかで比較することで生きてくるのでしょうか。特定の調査地での人々との世間話に耳を傾けるあまり、周辺地域の比較がなごりになっている私にとっては、あらためて自分自身の研究のありかたを考えさせられる機会がありました。

この日の内容は、1時間半の発表で時間切れのために尻切れトンボのまま終わってしまったという、京大退官時の最終講義の完全版ということで、加藤先生の薫陶を受けた学生を中心に若い方々が集まりました。タイトルにつけられた「川」のイメージは、蛇行しながら、ときには早瀬も淀みもある流れのものだと思いますが、会場に集まった面々を思い返ししながら、川は周囲から水を集めて大きくなるということも思い浮かびました。

河野元子（京都大学大学院）

人生を旅にたとえる話はよく目に耳にする。読んで聞いて、なるほどとわかったようで、時の流れ・積み重ねをそこに跡付けることは易しいようで難しい。それを川の流れるにたとえたらどうだろう、加藤先生は研究そして教育に愛情を注がれた／注いでいらっしやる人生の越し方を、臨場感あふれる、また飽きさせることのないストーリー展開で私たちに語ってくださった。予定を越える長時間のお話だったが、まだもっと聞きたいと多くの人を感じたことだろう。なぜだろう、講演からある程度の時間が経過した後、ふと考えた。面白いと感じたこと、心に留まったことを、つらつらと書き出してみて、深い山を源流とし蛇行している川を頭に描きながら作業をしている自分に気づいた。とてもヴィジュアルに、

具体的にひとりの人の人生を想像しているのだ。川とは上手い、まずそう思った。

先生は、源流、つまり学生時代・アメリカ留学時代そして上智での駆け出しの時に自分のスタイルをつくられ、京都にこられた。川の中流にあたる京大では、一貫して地域研究にこだわり、時にとまどいながら、一方で生態系研究者に出会いショックを受けたり、すでにあるご自分のスタイルを破ることに果敢に挑戦されたりした。この間には、当然ながら支流ができる。時に伏流化することもある。伏流として、人との出会い、教育のこと、組織のことを語られた。支流については、時に横道にそれたこともあったであろうと、私が勝手に想像したことを断っておきたい。下流、これはまさに今の研究と教育についてお話された。そして、時間があつたらと、河口つまり将来を語られた。ここでやりたいとおっしゃっている研究トピックすべては、「近代とは何か」を問うことに収斂される。

世界の川にひとつとして同じ川がないように、人の人生もけっして同じものはない。川の長短・流線、水の流れ・色と異なるように、短い生涯、長い生涯、平凡な人生、波乱万丈な人生、また忙しい日々、ゆったりとした日々、とその越し方は、それらの要素が複雑に絡まりながら、オンリーワンの異彩を放つ。川にたとえることで、何と具体的にその足跡を辿ることができるのか、その将来を想像することができるのか。

ただし、人生は、その人の姿勢で、面白くも、楽しくも、深くもなってくる（もちろん、生き方を選べない人々が現実にいることは忘れてはいけないのだが）。そういう意味で、加藤先生の人生は、とても素敵だ。聞き手をわくわくさせる。なぜだろうか。これは、今触れた生き方の姿勢の如何にかかわっているものではないかと思う。先生はいろいろな生き方の知恵を披露して下さったのだが、二つのことについて感じたままに書いてみたい。

源流の時、先生は半分不良だったそうだ。高校時代からその兆しはあつたそうで、大学に入ると授業は出ずに、昼間は麻雀とラグビーに明け暮れたとのことだ。しかし、夕方になると英語学校で毎日英語を数時間勉強されている。英語の勉強は、好きだったことと、外国とくにアメリカへの憧れがあつたようにも話されていたが、そのことが後にフルブライト奨学金（英語ははずば抜けてできたらしい）への道を切り開くことになった。まず、このことから、時にいけないことのように扱われる、好きなこと、楽しいことが人を前進させるという当たり前のこと、パワーの源になることを確認したい。これが、やりたいことに繋がっていくことも容易に想像できる。しかし、やりたいことばかりでは生きることは難しく、当然ながらその時自分のやれること、他方でやらねばならないことも考えねばならない。ただし、ここからが天の技だ。天からは雨が降ってくる。川に落ちた雨は恵にもなり、転じて災いにもなる。計り知れないのが人生だが、やはり、備え、積み重ねがないと恵みはふってこない、とくに研究人生はそうだとすることを大いに省みた。

さて、二つ目、ここで好きだということに今一度戻ってみよう。好きだということがやりたいことに繋がっていくだろうと書いたが、これはこうありたい、こうあつたらという「夢」ともいえる。「生きがい」といってもよいかもしいない。この出発点は何か。私は好奇心ではないかと思ったりする。本の出会いでもよい、もっと良いのが、知らない場所・

人との出会い、そこで起きる好奇心が夢をつくっていくともいえまいか。そうすることが、時に傷つきながらも、柔軟な心、「若い」心を再生産し、これが思考の活力になると先生のお話から私は感じた。さらに好奇心は、あるこだわり、蒐集という行為を生んでいくとも思った。先生の河口でのお仕事、椅子の研究もその成果のひとつであろう。ここで忘れてはいけないことがひとつある。これは京大での講義でもよく言われていた「問うこと」に対する真摯な態度である。「学問とは問うことを学ぶことだ」を思い出し、ひやりとした。しかも、自然体であることが加藤流だ。なかなか含蓄があり、一方で難しい。

最後になって、ふと妙な考えが湧いてきた。川の流れを人生にたとえていろいろと書いてきたが、川を走る小舟に身をまかせることを人生と考えることもできるのではないかと（この場合、山の湧き水のところがちょっと苦しいのだが、小川あたりからを想像してほしい）。小舟はいずれ河口部から大海にでる。海は広い。先生の大海での旅が、先生が生き方として追いたいとおっしゃっているクリントイーストウッドの夢に伍すものであることを、お土産話を期待して待ちたい、河口部で終わらせないでください、そう思いませんか。

石井正子（京都大学地域研究統合情報センター）

meandering まったく関係のない話で恐縮だが、加藤先生のお話を聞いて、ふとこの単語を思い出した。イギリスに留学したとき、ロータリークラブのホストファミリーのお母さんが、自分はこの単語が一番好きだといって、川の大きく蛇行する様子に人生をなぞらえた。加藤先生は、上流、中流、下流、河口へと川が流れていくようにと、研究の軌跡を述べてくださった。その流れが「蛇行」していたことをおっしゃっていたわけではないが、さまざまな風景を通りぬけて、水をあつめて、河口に近づくにつれ、大きく太くゆったりと川が流れていっているように、聞こえた。ちなみに私は、イギリスに行く前、鬼怒川を調べもせずにゴムボートで下り、滝に落ちたが、命拾いしたことがあった。研究もまったく同じで、蛇行運動を開始するまえに、滝に落ちてばかりいるが、なんとか河口までたどり着きたいと思っている。

加藤先生には、博士論文でたいへん丁寧な指導をしてくださったことに、感謝の意を表しつくせない。表の細かな数字までにも、チェックを入れてくださった。そのご指導がベネディクト・アンダーソン教授からの *pay it forward* の流れであったことを知り、私でその流れは確実に細くなるだろうが、止めてはならない、と思った。

